

令和五年度 入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】 説明的文章（論説）
〈出典〉

『友情を哲学する』（光文社新書）

〈筆者〉

戸谷洋志（とやひろし）

一九八八年、東京都生まれ。関西外国語大学准教授。法政大学文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。主な著書に、『スマートな悪——技術と暴力について』（講談社）、『原子力の哲学』（集英社新書）、『ハンス・ヨナスの哲学』（角川ソフィア文庫）、『Jポップで考える哲学——自分を問い直すための15曲』（講談社文庫）がある。共著に、『僕らの哲学的対話——棋士と哲学者』（イースト・プレス）、『漂泊のアーレント 戦場のヨナス——ふたりの二〇世紀 ふたつの旅路』（慶應義塾大学出版会）。近刊に、『未来倫理』（集英社新書）がある。

問一 漢字・語彙問題

a 漠然、b 暴力、c 把握、d たん、e 隔。漢字や語句に関しては、本文中でどのように使用されているかもあわせて学習したい。辞書などを用い、類語について知識も広がるよう学習したい。

問二 具体部と抽象部を問う問題

段落構成や文の展開を把握し、空欄部

に適切な語句を書き抜く問題。段落③⑤を参考に「Ⅰ 契約に基づか」ず、「Ⅱ 誰からも管理され」ず、「Ⅲ 常に解消可能な関係」である」と答える。完全回答。

問三 内容理解の問題

段落③④⑤を受けた抽象部の段落⑥⑦が答えの根拠となる。正答は、ウ「友情とは不安定なものであり、その関係を維持するためには友人に配慮したり働きかけ続けたりしなければ簡単に解消されてしまうため、新たな友情を築くことよりも難しいということ」。アは「その関係を常に自覚しなければ失われる」が本文にない表現。イは「その関係を保証するものがなく」とあるが、これは本文の「私の代わりに保証してくれるものは、何もない」に反する。エは「友人関係とは「自覚されにくいもの」というのが本文に根拠がなく、「新たな友情を築くのは難しい」と友情を築くことの難しさが主題となっており、問いに対して適切な選択肢ではない。

問四 内容理解の問題

段落⑨⑩を根拠に「友愛」と「友情」の正しい情報を整理し、正答を選択する問題。正答はウ。アは、「本来は自身を愛してくれる者と関わることを意味する」が、イは「まったくの同義語として扱われるようになり区別することがなくなった」が、エは「友情」は古くから同じ社会に属する者への愛を意味する」が本文

と異なる内容となっている。

問五 複数の文を読み思考する問題

辞書の意味を読み、文脈に合う適切な語を選択する問題。Aは直前に「分け隔てなく愛する」とあり「包摂」。BはAを受けて「包摂」、それに「対し」とあるのでCは「排他」。Dは友愛が「もともと有していた」とあるので「包摂」、Eは同様の語が入る文脈ではないので「排他」。

問六 全体の段落構成を問う問題

段落構成に合った適切な図像を選ぶ問題。正解はイ。

問七 本文全体を概観する問題

本文の内容や展開を概観し、適切な選択肢を選ぶ問題。正答は、ウ。アは「自ら積極的に働きかけなければ新しい友人は見つけられない」が本文にない表現であり、この箇所は本来友情を持続させることの難しさとして挙げられている内容である。イは「友情以外のすべての親密な関係は」が誤り。すべてではない。エは「筆者は「友情」と「友愛」の区別を行うために」が誤り。本文で筆者は「今後の議論の混乱を避けるためにも、ここで両者の違いを確認しておきたい」と、その意図を説明している。

【二】文学的文章(小説とその解説)

〈出典〉

『名場面味わう日本文学60選』(徳間書店)

〈筆者〉

・文章1 佐多稲子(さたいねこ)

一九〇四年生まれ、一九九八年に敗血症のため死去。職を転々としたのち、プロレタリア作家として出発し、日本共産党への入党と除名、窪川鶴次郎との離婚などを経て、戦後も長く活躍した。左翼運動や夫婦関係の中での苦悩を描く自伝的な作品が多い。

・文章2 田中慎弥(たなかしんや)

一九七二年生まれ。山口県立下関中央工業高校卒業。「冷たい水の羊」で新潮新人賞を受賞(二〇〇五年)。「蛹」で川端康成文学賞(〇八年)。「蛹」を収録した作品集『切れた鎖』で三島由紀夫賞(〇八年)、「共喰い」で芥川賞(一二年)、『ひよこ太陽』で泉鏡花文学賞(一九年)を受賞。著書はほかに『犬と鴉』『燃える家』『宰相A』『孤独論 逃げよ、生きよ』『地に這うものの記録』『完全犯罪の恋』など。

問一 漢字・語彙問題

A「勝氣にふるまう」の「勝氣」は「人に負けまいとする気質」の意で、「ことさらにかまえる」の意。よって、イの「負けまいとしてかまえる」が正解。B「劇的」の対義語は「現実的」「散文的」「日常的」であり、ウの「一般的」が適当でない選択肢となる。

問二 心情読解の問題

他の親類とは区別して、母には特別強いつながりを感じている幾代。傍線部の

「つながり」を具体的に問う問題。本文での該当箇所は「幾代の身体の悲しさがしれなかつた」であり、前世に由来する罪に関連して母と自分の身体のハンデイキヤップが分かち難く関係していると幾代は考えている。正解はウ。この問題は、あくまで「つながりの深さ」を具体的に問う問題であり、心情を問う問題ではない。よって、アとイは共に誤り。エは本文に根拠のない選択肢。

問三 心情読解の問題

「哀れみの感情」を具体的に問う問題。傍線部直前の指示語「その」を追えば、アイは適当な内容とわかる。「その」の指示語を辿り「哀れみ」の対象を追っていくと「幾代はそんな母親を想像すると」とあり、さらに「そんな母親」を追えば、「まだ母親は存在しているはず」とある。エは、死んでいるかもしれない母を思い浮かべており適当でない。傍線部の後の「幾代自身にも及ぼして」や「幾代の悲哀を深くしていた」の内容を追えばウも適当な内容とわかる。

問四 空欄補充問題

前述部を読み、その関係から適切な語を空欄に補充する問題。一つめの空欄部の直前には「不遇に負けない労働者のけなげな姿」「冷酷な旅館の経営者」とあり、二つ目の空欄部の直前には「栓を閉めて止った水」「幾代がいつまでも流し続ける涙」とあり、その関係が対比(対照)であるとわかる。

問五 風景表現を読み取る問題

傍線部直前に示されている「列車が出ていったあと、明るく照らし出される彼女の姿」、本文で言えば、「列車は音を立てて出てゆき、明るくなつたあとに街の眺めが展がった。が幾代は、再びもとの場所にもどつてしゃがみ込むと、今までと同じように泣きつづけた。その場所に、さえぎるものがなくなつて春の陽があつた。」の箇所の風景描写の表現を読み取る問題。アとイは該当箇所からずれており不適切。そのほかのイウエカの選択肢は場面としては適切だが、暗示や象徴の根拠が本文から読み取れないため不適切。正解は「なし」となる。

問六 内容理解の問題

【文章2】の傍線部の前後と【文章1】の本文とを読み比べ、適切な「幾代の行動」を選択する問題。【文章2】の傍線部の後、「書かれている通り、無意識の結果」とあり、それを根拠に【文章1】を辿ると、ウが正解。アは「蛇口の栓を閉めた」まではよいが、「再びもとの場所に戻つて泣いた」と適切でない箇所も含んでいるため誤答。エも同様に適切でない箇所のため誤答。イの「音をたてて蛇口から溢れ出ていた水がとまった」は、あくまで「水」を主語とした選択肢であり、設問の問う「幾代の行動」に適していない。文章をなんとなく読んで解答するのではなく、適切に読んで適切に答える力がなければ高校からの学習についていくのは厳

しい。

問七 会話文を読み思考する問題

生徒の会話文を読み、全体を概観しながら、その真偽を思考し判断する問題。生徒Dは「許してくれなかった主人に対して強い憎しみをもつのもあたりまえ」と述べているが、【文章1】を見ると「自分の弱さ」や「口惜しさ」という表現が適切で、「強い憎しみ」に該当する表現はない。よって、エが正解。

【三】 古文読解 〈出典〉

発心集

鎌倉初期の仏教説話集。鴨長明編。収録

説話は、発心出家した人々のさまざまな機縁を述べたものと、往生を遂げた人々のさまざまな行いを述べたものを中心。

問一 【歴史的仮名遣いの知識と現代仮名遣い（読み）】

a 「ゆゑ」は「ワ行」の「ゐ・ゑ・を」は「イ・エ・オ」と改めるため、「ゆゑ」となる。b 「云うやう」は、発音する場合は「au」↓「ou」となる。解答の条件として全て平仮名で答えよとあるため、「いうよう」となる。c 「あひぬれば」は、語頭を除く「は行」は「ワ行」に改める必要があるため、「あひぬれば」となる。

問二 【基本語彙】

A 「いと」は、程度が甚だしいの意で用いられる（とても）〈たいそう〉などと訳

す。よって正解はウ。B 「いとほし」は、動詞「いとふ」（「見るのが嫌だ」の意）が形容詞化した語と言われている。幼い者、弱い者を見ていると胸が痛くなつて目を背けたくなるというのが原義である。（かわいそうだ）〈気の毒〉などと訳す。よって正解はエ。C 「あやし」は、理解できないものに対する驚きを表す。〈不思議だ〉などと訳す。よって正解はア。

問三 【主体（主語）の特定】

「この持ち来たる物して食はず」のは、「正算僧都」である。そのためそれを受け取り「今食はんとする」のは「使いの男」である。よって、正解はエ。

問四 【内容理解】

この設問を解くにあたって、傍線部②の後の使いの男の発言に着目する。「方々尋ねられつれどもかなはで、母御前の、みづから御ぐしの下を切りて、人に賜びて、その替りをわりなくして奉り給へるなり。ただ今、これを食べむとつかまつるに、かの御志の深きあはれさを思ひ出でて、下臈にては侍れど、いと悲しうて、胸ふたがりて、いかにも喉へ入り侍らぬなり。（あちこちお探しになつても手に入らず、母御前がご自身の髪の毛の先を切って、人に与えて、その交換したものを、無理して（あなたに）差し上げたのである。今、これをいただこうとして、その愛情の深さを思い出し、（私は）身分の低い者ですが、とても悲しくて胸がいつぱいで、どうしても喉へ入らないのです。）」

と述べているので、正算僧都の母の深い愛情を感じていることが読み取れる。よって正解はオ。

問五 【助詞の理解】

傍線部③「涙」は、「流しける。」と続くので、連用修飾語を作り、時間・場所・目的・結果などを表す、「を」が適当。よって正解はウ。傍線部⑤「ためし」は、「多かり。」と続くので、主語となる文節を作る「が」を補うのが適当である。よって正解はア。

問六 【内容理解】

傍線部④「煙の中にかへり入りて」の直前の「なほ捨てがたさの余りにや（やはり捨てがたさのあまりであろうか）」から、子どもを捨てがたく思う気持ちが読み取れる。よって正解はア。

問七 【内容理解】

傍線部⑥「みづから胸の毛を食ひ抜き」の直後に「膚につけて、終日これを暖む。（肌につけ、一日中卵を温める。）」とあるので、正解はウ。

問八 【内容理解】

傍線部⑦「思ひの外に世を遁れる人ありき」の直後に「事のおこりは、鷹を好み飼ひける時、「その餌に飼はむ」とて、犬を殺しけるに、胎みたる犬の腹の皮を射切りたるより、子の一つ二つこぼれ落ちけるを、走りて逃ぐる犬の、忽ちに立ち帰りて、その子をくはへて行かんとして、

やがて倒れて死にたりけるを見て、発心せり（出家の原因は、鷹を好んで飼っていた時、その餌に飼おうとして犬を殺した時、身ごもっていた犬の腹の皮を射抜いて切ったところ、（腹の中にいた）子犬が一、二匹こぼれ落ちたのを、走って逃げた親犬がすぐに戻ってきて、その子犬をくわえて逃げて行こうとして、そのまま倒れて死んだのを見て、出家の志を持った。）と述べているので、正解はオ。

問九 【係り結びの法則】

文の結びは終止形だが、文中に係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」があると、係り結びとなる。傍線部を含む一文中に「ぞ」という係助詞があるので、連体形で結ぶ。そのため、正解はエ。

問十 【本文の要旨】

本文の口語訳を正確に行い、登場人物の心情・行動・その理由をとらえることが大切である。
本文は親の子への愛情の深さについて述べられている。そのため、「子が親を思う心よりも、子を思いやる親の気持ちのほうがはるかに深い。」という意のイが正解。

〈口語訳〉

思いがけなかったので、とてもありがたいと思ひ、しみじみと心動かされる。でも、何よりもこの使ひの男が、とても寒い中を、深い雪を掻き分けてやってきたのが気の毒で、まず火を焚いて、彼が持参してきた物を与えて食べさせた。（使ひ

の男が)食べようとして、箸を立て、ぼろぼろと涙をこぼして食べられなくなったのを(正算僧都は)とても不思議だと思ひ、理由を聞いた。(使ひの男が)答えて言うには、「この(正算僧都の母上が)差し上げなされた物はいいかげんにして手に入れた物ではありません。あちこちお探しになつても手に入らず、母御前がご自身の髪の毛の先を切つて、人に与えて、その交換したものを、無理して(あなたに)差し上げたのである。今、これをいただこうとして、その愛情の深さを思い出し、(私は)身分の低い者ですが、とても悲しくて胸がいっぱいで、どうしても喉へ入らないのです。」と言う。これを聞いて、おろそかに思うはずがない。(そこで)しばらく涙を流した。

全く、憐みの深いことは、母の思い以上のものはない。愚かな鳥獣までも、その慈悲の心を備えている。田舎の者が語りましたことには、「雉が子どもを生んで温めるとき、野火にあつたところ、一旦は驚いて立ち去つてしまふが、やはり捨てがたさのあまりであろうか、煙の中へ戻つてきて、結局焼け死んでしまふ例が多い。」と。

また、鶏が子どもを温める様は、誰もが見たことあるだろう。毛によつて身を隔てているのが嫌で思うからであろうか、自身の胸の毛を食いちぎつて、肌につけ、一日中卵を温める。えさをとるために、たまたまその場を離れても、卵が冷めないうちに、と急いで帰つて来るのは、並大抵の愛情とは思われない。

また、その昔、故郷のあたりで、意外にも突然出家した人がいた。「出家の原因は、鷹を好んで飼つていた時、その餌に飼おうとして犬を殺した時、身ごもつていた犬の腹の皮を射抜いて切つたところ、(腹の中にいた)子犬が一、二匹こぼれ落ちたのを、走つて逃げた親犬がすぐに戻つてきて、その子犬をくわえて逃げて行くうとして、そのまま倒れて死んだのを見て、出家の志を持った。」と話した。

思いやりをもたない鳥獣でさえ、子どものためには、このように我が身を犠牲にするほどに憐みが深いものだ。ましてや、人間が親の胎内に宿つたときから、一人前になるまで、熱心にかけてきた愛情は、たとえ命を犠牲にして孝行したとしても、報い尽くすようなことは難しいことだ。